

ドクターうどんげ誕生？

第一章・第一節

時刻は真夜中丑三つ時、迷いの竹林の奥深くに佇む永遠亭にて。いつもはうるさいてゐも輝夜も寝静まった頃、暗く妖しい一室で今宵も秘密の実験は執り行われる。

「確かにコレにこの薬品を入れたら：熱反応が起きるわ」

ピーカー内で起こる反応をまじまじと見つめていたのは『あらゆる薬を作る程度の能力』の保持者、八意永琳。なのだが：今この実験を行っているのは彼女ではない。彼女はただ見ているだけ。

隣で眼鏡を光らせ震える手で実験を続ける：白衣を着た弟子。

鈴「ここでソレを少量：反応を見て加えてですね」

永「へえ。なかなか面白いことを考えるじゃないの」

いつもは師匠である永琳の作った薬を人里で販売をしているだけだった彼女が、何故白衣を身にまとい薬を作る側になっているのか。事の発端はこの夜から数日前に遡る。

鈴「はあはあ：師匠く。ただいま戻りましたあ」

人里から薬の詰まったつづらを担いで帰宅。毎回へとへとなるけれど、師匠から与えられた仕事として彼女は誇りを持っていた。

永「あら、おかえりなさい。今日の売れ行きはどうだった？」

鈴「は、はい。予約されていたお得意さんへの常備薬一式、あと風邪薬と頭痛薬がそこそこ売れましたね」

永「そろそろ夜も冷えてくるし、風邪と頭痛への薬はこれから少し数を増やした方がよさそうね。報告ありがとう」

鈴「いえ！ では私はお風呂にでも：」

永「あ、そうだわ。ねえ：うどんげ？」

鈴「えっ？ はい？」

いつもと変わらぬ報告と対応。そして待ちに待った憩いのお風呂。と思いきや、唐突に師匠の口から飛んできた言葉は：。

永「よければ今度薬：作ってみる？」

鈴「え、へ？ え、ええええええっ！？」

いつもは薬を管理する、見る、売る、（たまに実験体にもされる）立場だった鈴仙にとつて驚愕の一言。一から材料を用意し薬を作ったことなど師匠が許してくれたことは無かった。

永「あなた以前から私が薬を作っているところ、熱心に見ていたでしょ？ そろそろあなたにもいいかしらと思つて」

鈴「そ、そそそ、そんな私がですかあ？！」

永「自分で作った薬を買ってもらえるようになるのよ。さらにそれが人々の健康にもつながる。どう？」

この時点で彼女の心は正直してみたい半分、怖い半分だった。確かに近くで薬の作成は見てきたが自分でやるとなると別問題。

永「私のお古の白衣が倉庫にあるからそれを着て、まずは私が隣にいてあげるから簡単なものからやつてみましょう？」

鈴「は、白衣！？ こ、光栄ですうっ！！」

その白衣が彼女の勇気を奮い立たせたきつかけになった。師匠が身に着けていた白衣をまさか自分が着て、人の為の薬を作れるようになるなんて思っていなかった。

永「簡単な薬の作り方をあなたに任せちゃえば、こちらもちよつとは楽になるし…」

鈴「えっ。それって結局仕事の押し付け…」

永「こ、コホン！ とにかく、今夜から早速始めるわよ。白衣を着て身を引き締めておきなさい？」

鈴「あ、え…はい！！！」

鈴「えへへ。結構似合っているかなあ？」

お風呂上り、身なりを整えて師匠が用意してくれた白衣を着て鏡の前でポーズをとってみる。お風呂上りにこんな素晴らしい姿を見てもいい、体は予想以上にホカホカ火照ってしまう。

永「あら、かなりお似合いね？ 新米薬剤師さん」

鈴「ふえあつ！？ ししし、師匠！？」

永「ほら…これでもかけてしゃきつとしなさい。集中しなきゃ手元が狂っちゃうわよ？」

鈴「は、はいっ！！！」

師匠が持つてきてくれた黒縁眼鏡をかけ深呼吸。白衣に少し染みついた薬品のほのかな香りが、さらに心を落ち着かせてくれる。

鈴「よーし！ 私、頑張ります！」

永「ふふ、まずは基本の薬の扱い方からね？」

鈴「はいッ！」

そんなこんなで始まった、鈴仙の薬研究生活。初めは失敗したり永琳に駄目だしされたりすることが多かったが。

永「ふむ…基礎と簡単な応用は順応できたかしら」

鈴「えへへ…やりましたあ」

一週間と少し経つ頃には師匠がとりあえず認めるほどの腕にはなることができた。この短期間でモノにできたのは鈴仙のやる気の賜物。その証拠に認められた時の彼女の瞳は、狂気じゃなく充血で真っ赤に染まっていた。

鈴「これで私も自分のオリジナルの薬を…」

永「うーん。一人で薬を作ってもいいけど…危険な劇薬とか変な毒とかは作らないでよ？ 作っても処理はきちんとすること。身の安全の為もだけど、ここの薬の評判も下がっちゃうのだから」

鈴「大丈夫ですよ。そんな難しい薬は作れませんし」

永「人や妖怪、この世界の為になるような新薬を…期待しているわよ？ うどんげ」

鈴「…えへへ。はいっ！」

そつと頭をなでられて頬が緩んでしまう。初めは爆発したり失敗したりが続いたけれど、いわばここからが本番。私が新しい薬を作るとき。

『師匠から認めてもらったのだから…劇薬や毒は絶対作らず、いろんな薬を世の中の為に…！』

永琳の思いは鈴仙にしっかりと届いていた。彼女は自己欲の為に

この経験を使うことは無かったからだ。ただ一心に師匠の期待に應えるために、世の中へと届ける薬を作るために。毎夜毎夜少しの寝る間をけずって研究に勤しんだ。

輝夜「毎晩、爆発音が鳴り響いているような気がする」

：と姫と兔たちの間で変な噂がされるまで至った。

そんな研究が続いたある日のこと。

鈴「かなり実験薬が増えてきたわね。とはいえまだ人体実験：動物実験すらまだだけど」

鈴仙の前に広がる彼女の作った薬の数々。飲み薬に塗り薬、錠剤など色や形も様々。

？「ほほう？ なーに面白そうなことやっているのかなあ？」

鈴「ぎくっ！！ …その声は」

猫撫で声というより兔撫で声を発していたのは、白衣の彼女を見てニヤついている因幡てゐ。

て「どっかんぽっかん毎晩爆発だの変な音だの…。寝られたものじやないよ、まったく」

鈴「あ、あはは…ごめん」

て「で？ その永琳の真似事はどういうこと？ まさか…永遠亭を裏から転覆させようと」

鈴「しーまーせーん！！≡ 師匠からちゃんとお許しはもらっていませんし、大体私が師匠を裏切るなんてこと月が落ちてくるほど有り得ませんから！！≡」

て「ふーん。ま、冗談うさ〜」

急な邪魔者に研究の手が止まり、てゐは興味津々に並べられた薬を見ては：

て「なにになに？ 『風邪薬』『筋肉緩和剤』『鎮痛剤』？ なーんか普通じゃん」

鈴「く、薬だから当たり前でしょ！？」

て「こっちは…ん？ 『若返り薬』？ 『痩せられる薬』！？ ちよつととんでもないもの作ってない？！」

鈴「いやその…試薬だからまだ試してもないし？」

て「みんなが喉から手が出るほど欲しい薬だよ！？ 薬飲んだだけで痩せられるなんて！」

鈴「いや…それほどでも≡」

変におだてられてちよつぱり照れてしまった鈴仙。その油断の隙をいたずら好きな彼女は見逃さなかった。

て「じゃこれもーらいっ！！」

鈴「え、はあっ！？≡」

痩せられる薬の入った瓶をおもむろに奪取！ 瓶の錠剤を数粒手に取りにやにやと笑う。

て「この薬はお前には勿体ないし、これで毎晩の大騒ぎもチャラつてことにおいてあげるから！」

鈴「いやいやいや！…だつてそれはまだ試薬段階で！…」

て「最近ニンジンの食べ過ぎでお腹が気になっていたし。そんじやま、いっただきい！！」

反対を無理やり押し切つて、てゐは錠剤をぐくりと服用。

鈴「ちよ！こら、早く返しなさ…ああつ！？」

て「…ぶえ…につが…。やっぱ薬を飲むときには水がいるよなあ」

鈴「え、あんた…瓶ごと全部！？」

て「んふう…」いやあ、だつてこういうのつてたつぷり飲んだ方が効きはいいつていうでしょー？…」

鈴仙が取り上げた瓶には薬は残つておらず、得られたのはこの薬は苦くて飲みづらいという感想のみ。

鈴「だ、大丈夫？！ 身体に異変は！？」

て「ちよ、うるさい。触るな、近寄るなあ…」

てゐはじりじりと迫る鈴仙から後ずさりしていく。襲つてきたわけでもなく、鬼気迫つたわけでもなく、鈴仙はただ心配していた。心配して近づいただけなのに、てゐは怯えて震える。

鈴仙が大きく見えるから。

鈴「て、てゐ？ なんかに縮んで…？」

て「う…ぎゅ、むううう…」

どんどん大きく見える。自分の視線が下がり、身体が震え動くことができなくなっていく。まるで何かに上下から押し付けられているような。自分だけ重力が急に強くなったような変な感覚。

て「む、ぎにゆううう…」

変な声が漏れる。そして押さえつけられる力はどんどん強くなる。鈴「いや…うそ…」

むにゅむにゅ…ぎゅぎゅぎゅ。目の前で身体が変化していく。その変化がもし膨れ上がった脂肪を押し戻し、魅惑のボディになれるのならこの薬は成功と言つてもよかつた。だがこの薬は失敗作。身体が横ではなく、『縦』に押し潰されているのだから。

て「ぎゅ、みゅ…ううい…」

鈴「す、すごい…見事にへったんこ…」

喋りたそうにしているが、肝心の口も潰れてしまい声を漏らす程度しかできない。常時上を向いたままびくびくと震え、見えない重力に押し潰されるといふ未知の感覚に襲われ続けるしか彼女はできなかった。

て「うしやああああああ…」

永「と、いうことがあつたのね」

鈴「はい…。てゐは未だにベッドの上で、重力らしきものに襲われているので…」

永「痩せられる薬だなんて、急に難しい薬に挑戦したわね？ 縦に潰れてしまう薬は流石の私も作つたことがないわ」

ほ

ん



鈴「へ！？ し、師匠も?!」

永「長年生きてきたけどそんなこと考えたこともなかったわ」

怒られるかと肝を冷やしていたが、むしろ誉め言葉が返ってきた。師匠も考えたこともない薬を、失敗作とはいえ作れたのだ

永「てゐのことなら安心なさい。私の以前作った痩せ薬と効果が似ているから数日経てば戻るわ」

鈴「よかった…」

永「あの子の食欲があればもっと早く治りそうだけど」

鈴「あの薬、やっぱり捨てた方がいいでしょうか…こんな効果の薬必要ないですよね？」

永「それはあなたが決めなさい？ あなたの薬なのだから。でも、失敗作を改良して成功するケースもあるからもったいないかもね…」とだけ言っておくわ」

優しい助言と撫でてくれる優しい手。ミスや勉強には厳しいけれど、頑張ったら褒めてくれる。だから鈴仙は師匠のことを慕う。これまでもこれからも。特にこれからはこれまで以上に。

鈴「では師匠、今日この薬…人里の薬売りの時に並べてみてもいいですか？」

永「どうかしら？ 苦情が来てもこっちは一切関わらないからそのつもりでね？」

鈴「は、はい!」

二人は微笑みあい弟子は薬売りの支度に、師匠は患者の看病に戻る。

鈴「えーっと、その。てゐ…ごめんね?」
て「うしやあああ…うううう!!!」

一応きちんと謝って鈴仙はつづらを背負い今日も出かけ始める。

鈴「師匠！ 行ってまいります！」

永「ええ、行ってらっしゃい。気を付けてね」

鈴「はあい!!」

いつもより元気な声で門を飛び出す。いつもの道なのに白衣を着ているだけでなんだか清々しい。実験生活はまだまだこれから、失敗を重ねてもいつか師匠に認めてもらえる薬ができるまで。

鈴「よしっ！ 今日頑張るぞー！」

人里へ向かう途中でも、夜にやる予定の実験内容メモを読み期待を膨らませる。今日はどうしよう？ あれをこうしてみようか？ そう考えるうち目的が近くなり、閉じたそのメモ帳の表紙には…

『ドクターうどんげの実験薬』

…とやる気に満ち溢れた大きな大きな文字で書かれていた。